

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

オクトーバーイヤリングセールに臨場するために滞在していた英国のニューマーケットで、デルタブルースの訃報を耳にした。

04年のG1菊花賞(芝3000M)、06年のG1メルボルンC(芝3200M)という、2つの権威ある長距離戦を制したが、デルタブルースだ。競走馬として現役を退いた09年後半以降、北海道のノーザンホースパークで競技馬術用の乗馬として繋養されたのち、競技馬術からも引退した21年以降、岡山県のオールド・フレンズ・ジャパンで余生を過ごしていたが、10月8日に蹄葉炎のため黄泉の国に旅立った。享年23歳だった。

06年に達成された、日本調教馬によるメルボルンC初優勝は、2着馬も日本調教馬ポップロックだったこともあり、メルボルンCのお膝元である豪州では、センセーショナルなニュースとなった。もちろん、その快挙は日本でも大きく報じられたが、現地の狂騒ぶりは日本の比ではなかった。これをご理解いただくには、メルボルンCの背景をご説明しなければならぬだろう。競馬は世界各国で人気のスポーツで、それぞれの国や地域には、そこがシーズンのクライマックスとなるレースが組まれている。いずこもおおきな盛り上がりを見せるのだが、国ぐるみ、街ぐるみの沸騰ぶりとなると、抜きん出ているのが豪州の

メルボルンCである。

レースのキャッチフレーズは、“The Race that stops a Nation(=国の動きを止めるレース)”。その3分半ほどは、国民の誰もが手を止めてレースの行方を見守るから、国が止まってしまうのだ。メルボルンCは毎年11月の第1火曜日が開催日となるが、その日は、フレミングトン競馬場のあるヴィクトリア州は祝日となる。この日ばかりは、市民は仕事をしている場合ではないのだ。

メルボルンCを中心としたスプリングカーニバルの期間中には、競馬以外にも様々な催しもが行われるが、最大の呼び物は、メルボルンC前日に市内のスワンストリートで行われるパレードだ。その年のメルボルンC出走馬関係者が車にのって登場する他、メルボンCの過去の優勝馬たちまでもが、観衆の前をパレードするのである。日本で言えば銀座通りを、過去の名馬たちが闊歩するという光景は、ここでしか見られないもので、筆者は常々、競馬ファンならば一度は体験すべきものとして、メルボルンCのパレードをあげていた。

ところが、ここ最近はそのパレードに暗雲が漂っている。動物愛護団体の皆さんが、ここを狙い撃ちして示威行動を行うようになったのだ。そして、コロナ禍においては、言わずもがなの中止となった。さら

に、23年は地下鉄工事のため周辺地域の交通規制が激しく、スワンストリートを使ったパレードは困難として、場所を移し規模も縮小しての開催となった。そして、現在も地下鉄工事は続いており、24年もパレードの中止が発表されたのが、8月16日のことだった。市当局も競馬統括団体も、長年の伝統がそのまま消滅することがないよう、全力を尽くすことを表明しており、25年にはスワンストリートにパレードが戻ってくることを期待したい。

10月半ば現在で、11月5日に開催される今年のメルボルンCの前売り上位人気にいるのは、9月14日にドンカスターで行われたG1セントレジャー(芝14115)勝ち馬ヤンブリューゲル(牡3、父ガリレオ)、9月15日にカラで行われたG1愛セントレジャー(芝141E)が着だったヴオーバン(騾6、父ガリウェイ)といった、欧州調教馬たちだ。

今年日本からここに、高木登厩舎のワープスピード(牡5、父ドレフォン)が出走を予定している。同馬の現地初戦となる、10月19日のG1コーフィールドC(芝2400M)の内容と結果次第で、ワープスピードは有力馬としてメルボルンCに参戦する可能性もおおいにあるだけに、その動向に注目したい。